

復活（太陽系の外側）

1. 限り無くどこまでも被る全てを受容し、それでもどうにか持ちこたえる中で、新たな原因を生み出しつつ生き存えた地球。何億年もの間、そうであり続けることでしか成し得ないことを太陽に支えられながら実践する地球は、人間誕生の時を機に、少しの余裕を手にする。大きな仕事を終えて人間の形を持った生命たちは、その時から始まる地球時間での経験を、ずっとこの時を待ち望んでいた地球の意思と重ねる。終わりの始まりが、そこで動き出す。

太陽系を破壊しようとするその存在は、衛星や惑星を持つ天体(恒星)のそれらとの自然な繋がりや調和ある関係性を尽く嫌い、その全てを無きものにしようと、宇宙空間を好き放題暗躍する。しかし、それが許されるはずは無く、生命の永遠の変化と創造の原因の力を守ろうとする宇宙(生命体)の根源と繋がる更なる意思は、その存在の行動を抑え込んで、二度とそうにはならないよう、その力を宇宙の外側へと追い出そうとする。

ところが、なかなか上手く行かず、いつまでもその時が訪れずにいた時、その破壊の意思は、それまでと同じように行動を起こす中、新たな対象として太陽系を選び、そこに入る。

そのことが、なんと大きく事が動き出す力強い原因へと変わる。太陽が潜在させる(銀河の異端児級の)無限の能力を、

HP「無有日記」

<http://www1.odn.ne.jp/mu-mew/>

その存在は知らない。

2.宇宙の調和と自由な変化の様を支え続ける意思是、その時、すかさず太陽系の各天体(惑星)と意識を重ね、そこでの経験の全てを記憶することで、それを、その存在の破壊の意思の把握とその原因の浄化の手立てとする。

各天体に送られた意識(生命)は、そのままそれを携えて、地球がその準備を整えてくれた時に人間となる。それまでの時の記憶は大いに活かされ、再度その原因を(逆方向から)通り抜けて太陽系の外側へと戻り、そこから、宇宙の外側へとその負の原因全てを送り出すその(時の)ための浄化を実践する。

何が起きても、どんな風に病まされても、太陽の力を借りてそのままの地球の姿に、その存在は焦り出す。その時々原因全てが浄化されてしまうことによる、それまでと同じようには行かなくなるその活動は、より強力・凶暴となり、それは、「復活」の内容へ、そして「再生」での形ある経験へと変わっていく。

そして、その存在の意思が人間の形を手にした時、彼らの思惑は、終わりへと向かう。人間経験は、真を持たない彼らには、どこまで行っても真似事。どんなに狡賢く破壊・征服の意思を強めても、人間本来という次元に普通に在る生命としての知恵には、そのどれもが足元にも届かない。潰し切ったようでも、人間の芯(心)は生き存え、腐らせても、何度も健全な

心が変わる。そう、全ては分かっていたこと。その時が来るまで分からないでいられる原因は、太陽系の外側から始めて(始まって)いたこと。大きな役を担ってくれた太陽に感謝し、地球の個性を貴く思う。

そして、この「復活」の原因で、奇跡という名の普通を押し上げ、太陽系のその本来へと動き出す道を確認にする。この地球(地上)に残ったままのあらゆる病みのその土台(原因)は、それにより姿を無くす。その懐かしくもある新たな地球で、そこに居られる人間は、生命そのものを普通に生きる。他の天体も、そこに居る衛星たちも、一緒になって、太陽時間を元気に生きる。太陽系全体が、ふわふわとして、柔らかく輝き出す。
(by 無有 11/21 2018)

感性は再生する。自由に(無限に)、柔軟に、人間の普通によって、生命の意思は表現される。

そして、その度にその原因は記憶され、その全てが浄化される時を経て、彼らは(変化・成長とは無縁の)結果だけの世界にしか居られなくなり、生命世界の次元の中で異物となる。数を増やしても、量に頼っても、それらを力にしようとするそのことが、その自覚もなく(何も分からず)地球の外側へと押し出される道を自らが作り出すことになり、そのどうにもならなさの中で、彼らは、思わず LED 照明を世に送り出す。

3. 人間の経験を活かして地球仕様に生み出された、水や土を無生命化させる程の LED の光は、地球に生きる生命たちを時間をかけて確実に死滅へと向かわせようとする意思を、その原因に備える。その性質は、まさに太陽系に入り込んだかの存在のそれと繋がり(同質で)、その事実も、何億年もの時を経てやっと迎えることの出来た、その終わりの時を意味する。

恐ろしく凶悪な破壊力を持つその光が誕生したことで、その大元となる意思の力に届かせ得る新たな原因は創り出され、これまでの原因の浄化のその経験(の原因)を通して、それは、天体規模の仕事をするに至る。それこそ、地球と地球に託された人間たちの望んでいた機会。その時に辿り着けた喜びを共にし、耐え続けた天体たちも安堵する。

LED 照明が生まれるずっと前からその凄まじい負の力の

原因を感じつつ、この無有日記の時に生を合わせて集まった生命たち。未来地球にとって最も重要なこの現代に生きる彼らによって、地球は救われ、太陽系は復活する。もちろん、それも普通。その始まりは、人間時間では永遠の昔となる、遙か彼方の次元での太陽系の外側。そこここが繋がった。

4.「復活」の手前を簡単に書いてみる。それは、漫画のような、遙か遠くの原因の実。

太陽系の外側の宇宙空間で、追跡劇を繰り広げていた際、凶暴さのかたまりのようなその姿無き存在は、偶然、太陽系に紛れ込む。宇宙の調和を守る意思は、太陽の協力を得て、その存在に好きなようにさせ、そうであることで可能となる宇宙規模の仕事の重要さを、太陽と共有する。

宇宙は、太陽系の各天体に意識体を送り、そこでの経験全てをそのまま受容させて、時を待つ。その時、地球は、他とは異なるテーマを受け持つ。それが、この地球特有の力に支えられた、あらゆる原因の具現化(物理化)である。

天体規模の腐敗を愉しむ存在の、その全ての負の原因を受容・把握した地球は、人間という次元を招き、太陽と共にそれを形にして、新たな原因の時を創り出す。人間となった生命(意識)たちは、調和と友愛の原因を普通感覚で拡大させ、宇宙空間で好き放題破壊を繰り返していたその意思に、強力な刺激を与える。天体規模の非生命的な行為の、その人間時間(地上)版が、そこで繰り広げられることになる。

陽と遊ぶ。それぞれが個性を更新し、生命体としての表現を、共に生かし合い、重ね合う。回りながら回る。笑いながら歌う。みんなで乗る太陽系で、仲良く宇宙を旅する。

8.何億年もの間、太陽系は本来ではなく、元に戻ろうとする力も無いまま、不穏な様を馴染ませる。人間の住む地球もそうで、地球は、その人間によって、本来の姿を見失ったまま不自然さを生きる。

人間でありながら、その本質(原因)は全くそうではない、嘘の人間。太陽系を我が物顔に支配しようとする存在は、本格的なその決め手となるその時のために、心も感性も無く、人としての健全な知恵も(原因への)責任も備えない形ばかりの人間を、蛇絡みの経験を通して増やしに増やし、彼らをその格好の道具とする。

頭を常に働かせ、考えることからでしか動けないその人間たちは、それを不要とする本来の人間には恐ろしく異様となり、地球も、要らない負荷をかけられる。その嘘の人間たちによって作られ、増大する、LEDとその負の威力。異常さを普通とする彼らを通して、この現代を、地球の無生命化へのその完璧な負の原因にしようとする、その凶悪な存在の動きに、太陽系は危機感を覚える。

しかし、そうはならない(させない)ための原因をずっと積み重ねてきた生命たちの、そんな時でも余裕で原因で居続けるその人間時間における確固たる姿に、それは(危機感)は安

それだけ力が入っていたことの現れでもあるそれ(歪な数の力)は、そのほんの少しの人間の、その無限の原因の力で空疎となる。太陽の外側から始まった追跡劇は、そんな風にして、事を成し得る時をぐんと引き寄せる。この時代が要らないものばかりで出来ているということを普通に知る普通の人間たちによって、未来は、異常さと無縁の時空のそれとなる。

7. 太陽系の外側から見た時、そこには調和と友愛と、力強い生命の躍動が在る。どの天体も、個性豊かに時と遊び、思い思いにその意思表示を楽しむ。太陽を中心に回り続ける、ただそれだけで嬉しいその時の連なりは、何百万、何千万年という、人間時間では永遠の彼方となる時空を普通に創造する。

地球は、その中に居て、人間は、その地球の中に居る。太陽は、地球を生かし、人間は、地球に支えられる。他の天体との違いは、ただ地球が経験した、地球ならではのそこでの原因。動植物たちが育ち、人間が生きるという、他には無いその特性も、それは偶然のような必然。それが自分だけだけ。

その地球と共に、地球の望みに応えつつ生を繋いだ人間によって、地球は、生き活きとした顔を見せ、地球らしさを手にする。その変化に、他の天体も呼応し、太陽は、ここぞとばかり、生命力の源(原因)を送り出す。人間は地球。その中身は太陽系。人間を生きる生命たちの姿は、太陽系の外側から、輝いて見える。

いつの日か、みんなが元気になり、またいつものように、太

人間の次元には、太陽系の惑星皆が居て、太陽もそこに居る。人間でありながら、天体でも居る生命たちのその生命源からなる経験は、ここで「再生」となり、「復活」となって、この「太陽系の外側」の時を導く。後ろにも前にも繋がる場所を無くしたその存在の危うい意思(原因)は、ここからの EW で、限り無く無くなっていく。太陽系から出ることも出来ず、太陽系のどこにも見えなくなるそれは、気づけば、元居た場所(宇宙の外側)で、宇宙のことも忘れる。

5. 不安も怖れも、争いも衝突も、それらの原因は皆、この地球には元々無かったもの。地球に無いものは、太陽系のどこにも無いから、それらの全ては、太陽系の外側からムリやり持ち込まれたものとなる。無くてもいい経験の歴史を遠くに、人間は、初めて地球人としての道を歩む。人間は(人間であれば)、不安や争いの次元に居続けることは出来ない。

地球の外側には、太陽系の時空が在り、そこでの出来事を感覚的に知ること、人は地球に無いはずのものから容易に自由になれる時を創り出す。問題事の次元は姿を消し、そうであろうとする負の原因も力を無くす。太陽系の原因の世界に触れる経験は、無くてもいい世界のその元となる、太陽系の外側の原因からも、人を自由にさせる。

そして、普通に感じ取れるのは、不要に抱く不安や怖れの感情が、地球に負担をかけてしまうということ。人間の世界に無くてもいいものは、当然、地球にも要らないもので、それを

地球を病ませようとする意思は嬉しい。健康も平和も、地球自然界の本来の姿だから、そこでの違和感となる不安(の原因)を人間世界で生み出さないことは、地球に生きる人間の、その生の基本条件となる。

ただそれを知り、実践するだけでいい。すると、世の嘘が居場所を失くす。偽善も不公正も権力も力を無くす。元々この地球には無いものを基とするそれらは、不安や怯えを燃料とする地球の異物。元を辿れば、太陽系に在ってはならない歪な意思を原因とするものだから、その次元が、この先もそのままであることはない。

不安を材料とする問題事や病気関わりの世界というのは、それを良しとする不穏な数の力で支え続けられるという、重量級の負の原因をその土台とする。当然それは、地球の意思に逆らい、太陽系の望みにも抵抗するもの。そして、その全ては、消えて無くなる流れ(変化)に乗る。その土台の主が居場所を無くしていくわけだから、それは普通。太陽系の原因が癒され、調整されて行くこの時、人間は、自然界の生命たちと同じように、地球感覚の生を自然に生きる。

6. 太陽系の復活のために、地球が自身を守ろうとして生み出した、動植物たち。それでもどうにもならない時へと引っ張られる中、各天体での仕事を経て、人間という経験を始めた、宇宙の意思の分身のような生命たち。それらは、太陽系の外側からは、奇跡中の奇跡となる出来事。地球にとっても、それは

予想すらしなかった驚きの現実。

地球の、これまでの在るべき原因の道を遡っていくと、太陽系に入り込んだ非生命的な脅威によって火星が大きく力を無くしたことが、地球での生命たちの誕生に繋がり、地球が無生命化の意思に尽く侵されたことで、人間は、満を持して登場する。そうでなければその全ては存在せず、この現代に至るこれまでの地球の歴史も皆、そこでの必要性によるものであることが分かる。そして、今のこの地球の在り様。その宇宙のどこにも無い姿は、太陽系の外側のどこから見ても、面白く、限り無い希望と期待を膨らませるものとなる。

その必要性が深くから変化して行くこれから。その全てがこの時までのものであったから、必要性という意味も役割も大きくその質を変えて、新たな次元の流れへとそれは乗る。つまり、地球感覚という、生の基礎を持たない存在は皆、自動制御のようにしてその姿を持ち得なくなるということ。何もせずとも地球が本来となる中で、自然界は、不自然さの原因からなる物や形を(人間も)普通に処理し、無きものにしていく。

地球自然界にとって異物となる物や価値観を生きる力とする、形ばかりの非生命的な原因の姿(人間)。その性質に永いこと付き合い、その全てを受容してきた地球と生命たちは、そうであったからこそ担えたことと、その原因が勢い良く流れだすことの経験を以て、深くからの安心の時をここに迎える。

一生命としての本来を普通に生きるという、人間らしい人間の、その驚く程の(数の)少なさ。地球を腐敗させるために